



日本財団主催国際会議で山下氏退陣を訴える人々。福島県福島市。2011年9月11日

人々を欺く医師の 罪を問う

あざむ

文／保田行雄

被曝させられた 福島住民

私は、2011年5月上旬、ルポライター明石昇二郎氏に連れられて飯館村を訪れる機会を得た。3・11東日本大震災に続く福島第一原子力発電所の事故から30日余りを経た飯館村は、4月11日に計画的避難区域に指定、5月末日までの全村避難を求められていた。だが飯館村では牧場で牛がのんびりと草を食べ、のどかな光景が広がっていた。しかし、線量計は、数マイクロシーベルト／時と高い放射能汚染を示していた。

それでも、住宅地では住民はほとんどマスクもせず普通に外で仕事をしてきた。子どもも外でマスクも付けず遊んでいた。大変不思議な光景であった。案内されて立ち寄った酪農家の長谷川健一氏によって、その疑問が解けた。

長谷川氏によれば、村全体が計画的避難区域に指定される前日の4月10日、近畿大学の杉浦紳之教授が飯館中学校で住民に講演し、マスクをしない

で外出しても安全だと言っていたというのだ。

さらに、この杉浦講演に先立って、3月25日に、福島県放射線健康リスク管理アドバイザーに任命されたばかりの高村昇長崎大学医学部教授が、そして4月1日には、高村教授の上司で同じくアドバイザーに任命された山下俊一長崎大学教授が、飯館村で「マスクを着けて外出しなくても大丈夫だ、放射線は心配することはない」と講演し、村民は「すっかり安心してしまった」というのだ。

この「福島県放射線健康リスク管理アドバイザー」とは何か。原子力災害特別措置法によれば、都道府県知事は、住民に具体的な避難指示等をする主体とされている。山下氏は、その住民避難の指示権を有する福島県知事に対して、放射線医学の専門家として、助言をする立場であり、同時に知事に代わって住民に対し、放射能汚染にどう対処すべきか専門家として説明するといふ極めて重要な立場にあるのだ。

山下氏と高村氏は、3月19日に福島